

論文審査の結果の要旨

報告番号	博（生）乙第48号	氏名	唐更強
学位審査委員		主査 戸田 清 副査 連 清吉 副査 早瀬 隆司 副査 渡邊 貴史	
<p>論文審査の結果の要旨</p> <p>唐更強氏は、平成9（1997）年7月に上海交通大学を卒業、平成22（2010）年3月に長崎大学大学院教育学研究科修士課程を修了、平成25（2013）年3月に長崎大学大学院生産科学研究科博士後期課程を単位取得満期退学した。平成27（2015）年10月に主論文『日本神話と中国神話・伝説の比較考察——『古事記』における伊耶那岐命（いざなぎのみこと）・伊邪那美命（いざなみのみこと）神話を中心に——』を完成させ、参考論文として、学位論文の印刷公表論文6編（うち審査付き論文3編）を付して、博士（学術）の学位を申請した。長崎大学大学院生産科学研究科教授会は、平成27（2015）年12月16日の定例教授会において論文内容等を検討し、本論文を受理して差支えないものと認め、上記の学位審査委員を選定した。委員は、主査を中心に論文内容について慎重に審議し、公開論文発表会を実施するとともに、最終試験を行い、論文審査および最終試験の結果を平成28（2016）年2月17日の生産科学研究科教授会に報告した。</p> <p>以下論文内容要旨</p> <p>『古事記』における伊耶那岐命・伊邪那美命神話を中心に、日本神話と中国神話・伝説をいくつかの論点から比較考察した。</p> <p>第1章では、『古事記』のヒルコ神話について考察した。ヒルコが流される「葦船」の意味こそ、この神話を解釈する際の肝要な点ではないかと考え、「ヒルコ」「葦」「船」の意味を考察した。葦で造った船に不具のヒルコを乗せて流すことは、力と生命の具現者である葦との直接の接触で、ヒルコが健康な子どもとして新生、再生することを願った意味があると解釈した。また、邪気を払う機能を有する葦で造られた船に、不具のヒルコを入れることは邪悪なる子を葦で囲んだ船で捨て去ることを意味する可能性があることを指摘した。先行研究では「水蛭子」か「日子」かについての論争がある。氏はヒルコが「日子」でなく「水蛭子」だとした上で、通常の「水蛭子」説が単純にヒルコを悪者や不都合な者とみなしているとは一線を画す。本論文では、古代的呪術的な見方として、ヒルコを邪悪な存在として葦船で捨てるが、親子の情でヒルコが葦船の生命力に触れ別世界で健康な子に生まれ変わることを願っていて、善悪両面を有するという独自の解釈を提起した。</p>			

第2章では、『古事記』の「造化三神」の「三」について考察した。『古事記』冒頭部の始原の神の数が「參神・三柱」であり、高天原という天上世界に誕生していることは、天との関わりにおいて「三が万物の起源」を表す中国の数字観念に影響された可能性があるのではないかと指摘した。先行研究では中国の「三・五・七」という単なる陽数（奇数）が並んだ良い数字の羅列として聖数概念の影響をみている。本論文では、中国古代の三が天地人や日月星のほかに、天と関係し万物の始まりをも意味することから、古事記の始原の神が參神・三柱で高天原という天上世界に誕生していることについて、天との関わりで「三が万物の起源」をあらわす中国の数字観念の影響があることを独自に指摘した。

第3章では、なぜ伊邪那岐命は桃の実三つを投げるかについて考察した。先行論では、中国で桃自体に邪気を払う力があるとされた点のみで説明されてきた。氏は、「桃」と「逃」の発音が同じで、「逃」は「亡」と意味が繋がることから、「桃」を投げることで、「邪気を逃げ返らせる」「邪気を亡ぼす」という意味が掛け言葉的に使われている可能性があり、また桃は婚姻・生育・健康・長寿と深く結びついた陽気と関わる植物であり、その陽気が陰気である邪気の対極にあるとした。なぜ三つでなければならないかについては、三つの事物あるいは三つの段階により、一つの事業と功績が完成するという観念が、三が持つ万物を生み出す生命力と結びつき、対極である死の世界の雷神たちを追い払えたとした。なぜ、桃の実であって、桃の枝などでないかについては、実は植物の精華であって特に邪気払いの力が強い部分で、枝や花よりも効果的であるからだとした。即ち、西王母などが持つ不老不死の桃の実にも窺えるように、不老不死の桃の実は生の極致であり、死の黄泉の国の魔物たちと対極に位置すると考えられるからだとした。このように、先行研究よりも総合的な考察を行った。

第4章では、『古事記』国生み神話の「八」および「八」に関する構造について考察した。古代神話においては日中共に、地上世界と天上世界の関係について、天地接合という同様の観念を見出すことができる。それは、大地の果てが天と繋がっているという観念である。「八」は中国でも地の果てと関わる数字で、日本の「大八島」の発想と関連をもつ。さらに九だけでなく「八」も中国では古来、完璧を表わす聖なる数字で、日本の「大八島国」の完璧を表わす聖数観念は、中国の古典の「八」の聖数観念を受け継いでいたのではないかと推測した。先行研究では中国の大地は九であらわされ、日本の「八」とは関係ないとされてきたが、天地接合の観念を基に、九州の外側に大地の果てとしての「八荒」があったことに注目すれば、日中共に完全をあらわす神聖な数字「八」が広大無辺な大地をあらわす点で共通であることを発見した。

第5章では、『古事記』の黄泉の国説話における「八雷神」について考察した。先行研究ではなぜ、「八雷神」が存在するのか、「八」である点に十分納得のいく説明がなかった。氏は、伊邪那美命の身体に「八雷神」があったのも、松村武雄氏の説く「死霊追跡阻止のために屍が八つに分割された」という説に相当する中国古代の「八創」と「別葬」との意味を含んでいるのではないかと考えた。つまり身体の八つの部位のそれぞれに恐ろしい魔物がいたことは、伊邪那美命の死霊復活

を恐れたために、体が八つに分割されたことを暗示するという新たな解釈を呈示した。

第6章では、「一日に千頭絞り殺さむ」と「一日に千五百の産屋を立てむ」の解釈について考察した。先行研究では千、千五百の差から、一日に五百増えると言う人口増殖の説明としてのみ論じられてきて、なぜ千と千五百でなければならないのかという点の考察が不十分であった。氏は、中国の古代文献にある数字観念のなかで、「参（三）天両（二）地」の観念から、天上の高天原に関するものは三、地上の葦原中国に関するものには二との関わりが見出され、多数を表わす五百と掛け合わせることで、千五百、千の数字が生まれた可能性を論じた。即ち、千は五百の二倍であり、千五百は五百の三倍であって、地母神の伊邪那美命が「汝の国の人草を、一日に千頭絞り殺さむ」、天父神の伊邪那岐命が「吾一日に千五百の産屋を立てむ」と言い合う対話は「三天両地」という数字に対応しているのではなかろうかと解釈したのである。本論文では、「千（二×五百）」「千五百」（三×五百）」の数字自体に地母神・天父神の対立が見られるとした点で、独自性を見出せる。

以上のように本論文は、「葦」「桃」という植物の持つ象徴性のほか、従来、日中の学者がほとんど手をつけてこなかった中国の古代文献における二、三、五、八の象徴的意味あるいは数字構造を詳しく考察した点で、独自性を持ち、数字の意味や構造が多用されている『古事記』の伊邪那岐命・伊邪那美命の両神をめぐるいくつかの神話の新たな意味を解釈した点に意義がある。

今回の学術的意義は、①古事記神話解釈の方法としての象徴的分析の有効性の確認、②日中比較神話における日本側の受容水準の確認、③従来指摘されていなかった点においても、中国の神話伝説の日本の神話に対する影響を見出した点、④全体として、『古事記』の神話解釈に新たな視点を与えて、今まで難解であったり、不審であった点をより合理的に解釈した点、⑤今回扱わなかった部分についても、今回の成果を神話解釈に適用できる見込みを持たせたことであり、特に「三」の象徴的意味は古事記の他の神話にも適用できると思われる。

学位審査委員会は、本論文が、東アジアの古代文化の相互影響関係について、日中の比較神話学的視点から、数観念を軸としつつ、先行研究をふまえて新たな視点からの解明を積み重ねたものであり、東アジアの文明の源流の解明に貢献すると考えた。また、現代においては日中韓の対立もみられるところであるが、古代の文明交流についての理解を深めることは、諸文明の相互理解にも貢献すると思われる。このように本論文は、古代文明の解明に大きく貢献するとともに、東アジアの諸文明の相互理解にも貢献するところが大きいことから、博士（学術）の学位に値するものとして合格と判定した。